

『変身』読書感想

内藤 真理子

読書会で、フランツ・カフカの『変身』が取り上げられた。

「ある朝目を覚ましたら、自分が巨大な虫になっていて」で始まる、あの有名な本だ。学生の頃読んだことがある。あまりに強烈だったので、私の頭の中では巨大なゴキブリに変身した男の話で固まっている。

今回読んでみたら、変身したのは、特定の虫ではなく、主人公のグレゴール・ザムザと等身大で、醜く、気持ちの悪い虫になったのだ。

グレゴールは一家の働き手で、両親と妹の生活を支えていた。家族思いで、父の借金も返していたし、もっと良い暮らしをさせたいと思っていた。だが、虫になったのもう働けない。

ではなく、働きたくなくなった。そこで自分も周りも、働かない、役に立たない彼を「毒虫」と見做した。こうして物語は作られているとも読める。

父親は虫になった息子にリンゴを投げつけ攻撃する。その一つが毒虫の羽に食い込み、深手を負ってしまう。母と妹は彼を庇い、それ以上の父親の攻撃を止めさせる。

やがてリンゴは腐り、虫の体を蝕む。

何故彼を愛している母や妹は、体に食い込んだリンゴを取り除いてあげないのだろうか、私は不思議だった。そして気が付いた。

家族だとは言え、醜い毒虫なのだ。触るのも嫌に違いない。いや、毒虫でなくても彼は働きもしないで家の中をウロウロしている目障りな存在になったのだ。働かない兄は毒虫と見做され、排除すべき邪魔者となり、家族の意識の中で醜い毒虫に変身させられた。

彼は思った。今まで、働いて家族を支えてきたのだ。毒虫になったからと言って見捨てられる筈はない。何より家族を愛している。

だが、働き手を失った家族は、収入を得るために、部屋を貸すことにする。貸し間は清潔にしなければならない。そこに巨大な虫が姿を現す。間借り人達は怒り心頭、出て行ってしまおう。今やグレゴールは生活を脅かす者になった。

と同時に、抹殺すべき毒虫に……

心優しい彼は、家族の気持ちに応え死んでいったのだった。

※『変身』原田義人訳